

世界自然遺産「小笠原諸島」の海浜植生の保全に関する研究



自然・環境再生研究部 生物資源研究グループ

石田 弘明

世界自然遺産に登録されている小笠原諸島は、海洋島ならではの特殊な生物相や生態系がみられるという理由で「東洋のガラパゴス」と呼ばれています。

小笠原諸島の父島・母島の海浜にはイネ科の多年生草本であるチガヤの優占群落分布しています。しかし、本諸島のチガヤは国内外来種であると報告されています。

本研究では、小笠原諸島の海浜植生に対する国内外来種チガヤの影響を明らかにするために、同諸島父島の海浜で調査をおこないました。その結果、在来のゲンバイヒルガオ群落とハマゴウ群落がチガヤの侵入を受けてチガヤ群落に変化した可能性が高いことがわかりました。このような現象は、小笠原諸島の海浜植生を保全していく上での大きな問題の一つであるといえます。



調査地のチガヤ群落



ハマゴウ群落（海側）とチガヤ群落（内陸側）



汀線の近くに分布するチガヤ群落



低木群落の周縁部に分布するチガヤ群落